

# THE FEDERER BACKHAND

## USING ANALYTICS FROM A COACHING PERSPECTIVE

<フェデラーのバックハンドの分析>

マーク・コヴァックス博士  
ダミアン・ソーダー

最高のテニスプレーヤーと言われているフェデラーのテニスに欠点を探すのは難しいことではありますが、この5年間、世界のトッププレーヤー相手から、プレッシャーの掛かる場面で、バックハンドを効果的に攻められ続けてきています。いったいフェデラーのバックハンドのどこにミスが多く、コート上のどのエリアでこういったミスが多いのかを分析してみました。今回の記事の目指すところは、コーチの皆さんがどのように分析して指導している選手を上達させ、また、将来対戦する可能性のある相手の弱点をどのようにして探したら良いかのお手伝いをするににあります。コーチの仕事は、携わる選手の技術の向上と、対戦相手の分析をして、勝機を増してミスを減らすための戦術を導き出すことにあります。

この記事では、2012年のオリンピックのフェデラーとマレーの決勝戦を分析してみました。試合は、マレーが6-2, 6-1, 6-4で勝利しました。この試合でのフェデラーの状態は最高とはいえませんでした。敗因の分析をすることで、上手いかなかった時の弱点を浮き彫りにできます。ここで言うおきたいことは、この記事はただこの一試合だけを基準にして、コーチの皆さんの今後の参考になるような、幾つかのパターンを導き出しているということです。

よく言われていることですが、フェデラーは肩よりも高い打点でのバックハンドの安定性に難があります。それが故に、ナダルに対しては10勝21敗、マレーに対しては9勝11敗と負け越しています。以下に、彼らがフェデラーに勝ち越している理由の一つを説明します。

【テニスプロの11ページの図を参照してください】

### \*2012オリンピック決勝戦でのバックハンドの分析：

決勝戦のデータから明らかなのは、さがりながら処理をするバックハンドでのミスが目立っていたということです。図の中の緑の線は、フェデラーがバックハンドを打ちに行く動きを示しています。

この試合で、フェデラーは100本のバックハンドを打つ機会があり、その27%がミスとなっていました。これは、総打球機会の35%にミスがあった彼のフォアハンドに比べてみると少なかつた訳ですが、試合の重要な局面ではバックハンドのミスが多かったのです。自分や相手のゲームポイントにおけるフォアハンドのミスは22%だったのに対して、バックハンドでは52%もミスをしていました。この結果は、彼自身にも相手にも有益な情報といえるでしょう。この結果から言えることは、彼は大きなポイントのかかった場面では、フォアハンド以上にバックハンドで苦しんでいるということです。決勝戦でのバックハンドのミスの86%は、さがりながら打っている状態で起きていました。打つための移動距離は、ほんの数歩であったり、コート半分を動いて打って

いたり様々です。彼のミスの原因は、打球のための移動距離よりも、動く方向にあったと言えます。横に動いたり、前に動いて打っている時のミスは72%でした。

### \*フェデラー対策：

皆さんの教え子がフェデラーと対戦することはないかもしれませんが、同じようなゲームスタイルだったり、同じような長所や弱点を持っている相手と対戦する可能性はあるでしょう。そういった相手との対戦を控えているとしたら、大事なポイントの時にはバックハンドを狙って、しかも、さがりながら打たせる戦術を教えますね。このための最も簡単なパターンは、相手のフォアへでもバックへでも短めのスライスを打って、相手を数歩前に引き出します。そして、次にスピンをたくさんかけてバックハンド側に高く弾むボールを打ち、相手がさがって処理をしなければならぬ状況を作ります。ナダルもマレーも、フェデラーに対してこの戦術を上手く使っていました。相手の傾向や長所や弱点を元にして、自分のプレーヤーを優位なポジションに立たせ、相手を居心地の悪い状況においこむための何球かの配球をする同様の戦術を考えましょう。

### \*フェデラーへのアドバイス：

ひとつ言えることは、バックハンドへの入り方を、さがりながらではなく、横方向もしくは前に踏み込んで打つ機会を増やす方法を指導することでしょう。これには2つの良い方法がありますが、何れもコートポジショニングに関係があります。ひとつは、従来通りのポジショニングをしていて、バックに来たボールをライジングなどの早いタイミングで処理をする方法です。こうすることで、さがりながら打つことはなくなり、従って、ミスのチャンスも減ることになります。しかし、こうすることで打球までの時間的余裕がなくなるので、良いフットワークが必要となります。もし、こういった対応力がないとしたならば、もうひとつの方法はボールを待つポジションを60～90センチさげることです。こうすることで、打球のポイントは従来と同じでも、前に動いての処理が可能になります。相手の打球への反応時間も変わることはありません。

傾向を見て分析をすることは、現代のテニスではどんなレベルでも重要性が増してきています。お伝えした方法のいくつかは、プロのように自分のゲームパターンや打ち方を簡単に変えることが難しい、弱点がより際立つジュニアや学生やレクリエーションレベルのプレーヤーにとって試す価値のある方法だと思います。とはいえ、ボールの処理がうまくできなければ、相手の癖を理解して、成功と失敗の比率を理解するだけで試合に勝てるわけではありません。しかし、述べたようなパターンでの配球が上手くできれば、こういった分析が意味を持って、より多くの試合への勝利につなげることができるのです。

#### 【筆者紹介】

\*\* マーク・コヴアックス博士： テニスプレーヤーの全般的な競技力向上と障害の予防を目指し、指導者に根拠に基づいた教育と認定を行う先進的な団体であるInternational Tennis Performance Association(iTPA; [www.itpa-tennis.org](http://www.itpa-tennis.org))の共同設立者。現在、ITFの“テニスと健康研究班”と“PTR科学諮問委員会”の議長を務める。

\*\* ダミアン・ソング - (旧; デマジ)： 地理情報システム開発企業であるEsri社の地理空間製品技術者。彼自身のウェブサイト“GameSetMap”で、テニスの空間的分析を発表している。